



海老原誠治 (えびはら せいじ)

いただきます.info事務局、三信化工株式会社、資源と環境と教育を考える会「エコが見える学校」、女子栄養大学短期大学部非常勤講師、関東学院大学非常勤講師。和食器を用いた出前授業や、テレビ局の撮影クルーの経験を生かして動画作成の研修会の講師も務める。

目的か手段か？ 動画・ICTを考える

連載を始めて1年、多くのセミナー依頼やご相談をいただきました。ありがたい一方で気になったのは、ICTに焦りを感じられている方々の存在です。今回は連載を振り返りつつ、ICT・動画の意味を考えたいと思います。

すでに誰もが活用

パソコンが苦手な人もいます。しかし多くの方が、電話やファックス、スマホ、栄養計算ソフト、献立表やおたより作成にエクセルやワードなど、何らかの目的でICTや機器に触れています。動画に関しても旅行の記録など、ホームビデオを私生活で使っている方も多いはず。この連載で扱う内容に関しても、その内容のほとんどは20年前、場合によっては50年前・100年前に確立した内容です。実は、すでに生活や仕事の手段・一部として実践していることは多いのです。

多くのものは淘汰される

ソフトでなく単体の機械としてのワープロをご存じでしょうか？ 昔はフロッピーディスクがあり、多くのソフトや接続ケーブルもありました。教育関係以外ではCD-ROMを見る機会も減りました。録音ではレコード・カセットテープ・MD、録画で

はVHSとベータカムなど、今ではどれも目にしません。

また数十年前に目的になり得たワード・エクセルの入門講座を振り返ると、今では便利な機能ではあっても目的にはなり得ません。同様に、現在注目が集まっているアンケートフォームや付箋・ホワイトボードのアプリなどの使い方も、将来それほど重視はされないでしょうし、もっと便利な機能が登場するかもしれません。

これを考えると、現在注目されているICTの動向に対して、少し冷静に見て良いと思います。

目的か、手段か

そもそも、ICTや動画は目的でしょうか。思いつくところを表1にまとめました。確かに教育目的の一部ではあります。しかし

表1 ICT・動画の目的（≠ICT・動画は目的）

1) 児童生徒にとって、より良い教育・食育であること
2) 児童生徒が、ICTに慣れること（現在と将来の技術に対応できること）
3) 児童生徒にとって、学習や生活が便利で効率的であること（データの使い回し、応用など）
4) 職員にとって、指導・コミュニケーションが便利で効率的であること（データの使い回し、応用など）

表2 ICT・動画では、できないこと

1) 味覚・嗅覚・触覚
2) 熱さ・冷たさ・暑さ・寒さ
3) 実物のサイズ感
4) 臨場感を伴う実際の時間経過
5) 重さ・力
6) 振動・雰囲気・遠近感
7) 近づいたりのぞき込んだり、好きな所を見たり動けること
8) 繊細な双方向性・コミュニケーション・行動による反応を得られること

日常生活を見ても、ICTは生活の一部でしかなく、手段ではありますが、目的ではありません。食育においても同様です。下手にICTや動画を多用することにより、「生きた教材」が損なわれ、食育の質が下がるのであれば意味がありません。

▶ ICT・動画による変化

とはいえ、児童生徒にとってICT・動画から受ける影響は少なくありません。書籍・漫画・TV放送に対し、好きな時に好きな内容が好きな表現で見られるYouTubeやWebサイトなどが増えていることを考えると、食育としても重要な手法といえます。

学習活動を見れば、プレゼンテーションソフトを使った発表等、児童生徒の活動は変化しています。教科書にもQRコードの記載が増えたといえます。近い将来、壁新聞はクラス内放送局になり、手描きであったノートも画像・動画・図表の添付やリンクであふれるかもしれません。これを踏まえ、学習活動の素材としての画像や動画を児童生徒に提供するなど、食育の発信方法も考える必要があります。

連載でも紹介してきましたが、おたより

表3 ICT・動画でしかできないこと

1) 少し前や過去の様子
2) 離れた場所・近づけない場所の様子
3) スロー動画・早回し動画
4) 拡大映像・縮小映像
5) 編集・まとめ動画（時間の短縮・抜粋）
6) 音声の拡大・縮小
7) 限られた力での操作（寝たきりでも疑似体験可）
8) 内部構造（3Dやアニメーション）

にQRコードやYouTubeのリンクを貼ることで家庭と学校との垣根が下がるなど、コミュニケーションのあり方も変わってきています。SDGs（持続可能な開発目標）・食品ロス削減など、家庭での行動変容が主となる食育の評価には、当然議論があるとは思いますが、YouTubeの動画再生回数が評価の1つとして定着することも想定できます。

▶ できること、できないこと

より良い食育が目的ならば、ICT・動画でできないところの再認識が大切です（表2）。すると逆に、体1つではできない、ICT・動画であれば実現できる多くのことも見えてきます（表3）。

ICT・動画ではできないことの一つに「実体験」があり、この大きな価値にあらためて気づきます。ICT・動画では「追体験」を再現できますが、初めての感動を生むことなどは困難です。これを踏まえると、「生きた教材」を基本とし、食育をより効果的にする一手段として、ICT・動画の特徴を整理し、活用することを心掛けたいものです。次号からも具体的な事例を紹介したいと思います。

【コンテンツ作成協力：（一社）はしわたし研究所】
【郷土料理データ提供：ロケーションリサーチ（株）】